

註

- 1 柳田国男 「石の枕」 (『定本柳田国男集』第
八巻 「女性と民間傳承」 筑摩書房 昭和五六
年 四一四〜四一五頁)
- 2 黄龍渾 『韓半島先史時代の「性穴」考』 (『え
とのす』第7号 新日本教育図書 一九七六年)
- 3 山口市教育委員会編 『神田山石棺』 (山口市埋
藏文化財調査報告書 第12集) 一九八一年
- 4 国分直一監修 『盃状穴考』 (慶友社 一九九〇
年) 所収 国分直一「盃状穴とその象徴的意味」
一八頁の図による。
- 5 国分直一 『海上の道』 福武書店 一七八六年
一三二〜一三九頁
- 6 国分直一監修前掲書
- 7 福岡県教育委員会 『三雲遺跡』 一九八〇年
- 8 国分直一監修前掲書所収 三浦孝一 「盃状穴考」
八一頁の表による

参考文献

『定本柳田国男集 第八巻』 柳田国男著 筑摩書
房 一九八一年

『柳田国男全集10』 (ちくま文庫) 柳田国男著
筑摩書房 一九九〇年

『えとのす』第7号 新日本教育図書 一九七六年
『海上の道』 国分直一著 福武書店 一九八六年

『神田山石棺』 (山口市埋藏文化財調査報告書 第
12集) 山口市教育委員会編 一九八一年

『盃状穴考』 国分直一監修 国領駿・小早川成博
編集 慶友社 一九九〇年

『列島の文化史 7』 網野善彦・塚本学・宮田登
編 日本エディタースクール出版 一九九〇年

『三雲遺跡』 福岡県教育委員会編 一九八〇年

石垣原合戦の史跡について

矢島 嗣久

豊後速見郡における石垣原合戦とは、慶長五年(一六

〇〇）九月十三日、天下を二分して戦われた濃州関ヶ原の戦いの二日前、大分県別府市石垣原（鶴見原）において、大友宗麟義鎮の嫡子で、西軍石田三成方となって豊後国へ再入国した旧豊後国主二十二代大友義統と東軍徳川家康方豊前中津城主黒田甲斐守長政の父黒田如水孝高との間で戦われ、大友義統が黒田如水の軍門に降った戦いという。

この合戦を「豊後速見郡石垣原の戦い」と通称いわれているが、石垣原は別府市の東側海手をいい、実際に戦いがあったところは西側山手の鶴見原であった。

一 黒田如水本陣跡

別府市鶴見、鉄輪線の「原」バス停とその東方にある実相寺線「平和祈念塔入口」バス停との中間付近、加来殿山（通称角山、標高約百七十メートル）南麓にある第一公園内の西側に「史跡 石垣原 黒田如水本陣跡 昭和四十七年五月十日 市指定」と記された石碑がある。

石碑の裏には「別府市教育委員会 別府市文化財調査委

員会」の解説が記されている。この石碑は昭和六十一年三月に建立されたものである。

加来殿山から約五百メートル東側には同じく東軍徳川方で豊後木付城（杵築市）の細川勢が陣を敷いた実相寺山（標高約百七十メートル）が見える。

細川勢とは、豊後木付城主細川越中守忠興の城代松井佐渡守康之と有吉武藏守立行らの軍勢である。

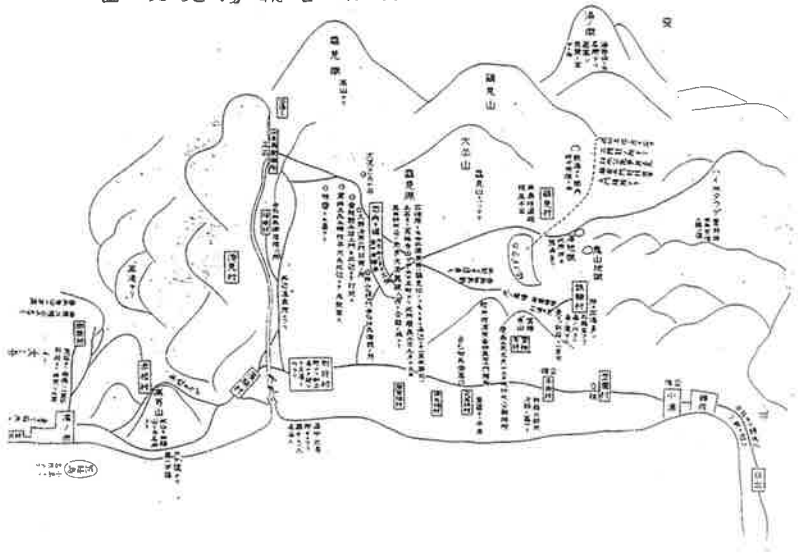
以前には、加来殿山西麓「原」バス停付近に「黒田方井上・野村陣所跡」の木製の標柱が建てられていたが、現在は見る事ができない。

井上とは井上九郎右衛門、野村とは野村市右衛門のことであって、いずれも黒田方の武将である。

現在、加来殿山は全山が開発されて分譲住宅地となり、次第に建築物が姿を見せている。また、加来殿山の東方にある実相寺山頂には白亜の平和祈念塔が建てられていて、遠くからでも見る事ができる。

二 石垣原古戦場 時枝陣所跡

石垣原古戦場見取図



加来殿山と実相寺山との中間付近は当時「犬の馬場」といい、東軍黒田勢の陣所跡でもあった。また、大友方右翼の武将吉弘嘉兵衛統幸の軍勢がこのあたりまで攻め寄せて、黒田方の母型^{もつり}や時枝勢が境川付近から引き退き、激戦した場所でもある。このことは「別府市誌、昭和六十年発行」によれば、元禄七年（一六九四）四月、筑前福岡の儒学者貝原益軒（篤信）が豊前・豊後を周遊した際に、衣笠半助に描かせた地図（付図）にも記されている。この原図は国会図書館の所蔵品という。

この実相寺山西麓で、ゴルフ練習場入口の右手南側付近に小さな石の祠があり、「石垣原古戦場」、「時枝陣所跡」の標柱二本が建てられている。ちょうど、この「時枝陣所跡」から南側の「平和祈念塔入口」バス停付近が道路の峠にあたる。

豊前宇佐時枝城主（宇佐市時枝、市の北西部）時枝平太夫は黒田方の武将である。

最近、加来殿山と実相寺山との中間にあたる「犬の馬場」付近の開発が進み、古戦場跡の変貌が著しい。

三 吉弘神社

実相寺山東南方七、八百メートル付近で、別府市石垣西六丁目（旧町名吉弘町）の北西部に、大友方右翼の武将、旧豊後国東郡屋山筑城主（豊後高田市、市の東部）吉弘嘉兵衛統幸を祀った吉弘神社がある。この神社は大正十一年（一九二二）九月に拜殿が建立されたものであるが、拜殿の裏手西側には吉弘統幸の石柱の墓や肥後の細川家が建立したと伝えられる石殿がある。石殿の右手前に「吉弘統幸の墓 別府市指定有形文化財 昭和四十七年五月十日指定 別府市教育委員会」の木製の標柱が建てられている。統幸は享年三十七歳という。

神社拜殿正面左手には大正十一年五月に建立された「下馬の松」の石碑や昭和五十五年（一九八〇）五月に建立された「吉弘神社の由来」の石碑がある。

「下馬の松」の石碑の表には「代から代へ縁傳えよ下馬の松」という碑銘が見られ、「吉弘神社の由来」には吉弘統幸の

明日は誰が草むす屍や照らすらん

石垣原の今日の月影

という辞世の歌も記されている。

なお、拜殿裏手にある吉弘統幸の石殿の右手北側には、統幸の家臣であった東国東郡武蔵郷（武蔵町）の「室理せいさえもんの墓」を含め数基の墓石がある。「室理せいさえもんの墓」には「万治二年（一六五九）亥正月十六日」とあるから、慶長五年の合戦から五十九

年後に遺族の手によって建てられたものである。

なお、平成二年九月九日には、当神社において三百九十年祭が行われ、東国東郡武蔵町の有志による県無形民俗文化財である吉弘樂も奉納された。

四 太平山 宝泉寺

吉弘神社の南南東方約八百メートル、石垣西三丁目（旧町名南石垣町）には吉弘統幸の菩提寺「太平山 宝泉寺」がある。ちょうど、市立中部中学校から約二百

メートル東側にあたる。このてらの正門には両脇に石柱があり、その右手に「石垣原合戦古戦場跡 吉弘統幸公菩提寺」の標注が建てられている。正門の奥にある山門の内側右脇には木製の標示板に「太平山 宝泉寺 縁起」が記されている。それによれば、「この寺は承安三年（一一七三）の創建という。その後、慶長五年（一六〇〇）の石垣原の戦いで当寺が焼失したが、豊後森藩主久留島氏によって再建された。また、当寺は吉弘統幸公の菩提寺なり」と記されている。

五 激戦地「七ツ石」

石垣原の戦いで最大の激戦地であったと伝えられる「七ツ石」は荘園町の東南部にあり、バス停「朝日橋」の西方山手側約百メートル、境川から百メートル北側にある。この「七ツ石」のバス道路沿いには、「史跡、石垣原合戦 激戦地」の標柱のほかに、別府市荘園町自治会の手による「石垣原古戦場 激戦地『七ツ石』」という木製の説明板が平成元年六月に建てられた。この資料

提供者は手嶋利勝氏及び故安部巖氏の両名である。なお、この「七ツ石」の敷地内にはその名称が示すように数基の大石のほか、「七ツ石温泉」や稲荷大明神がある。

六 石垣原古戦場公園

「七ツ石」の西方山手方向約百三十メートルの地点、「九州大学生体防御医学研究所付属病院（旧温研）」の南側バス道路沿いに「石垣原古戦場公園」がある。ここには「石垣原古戦場跡」の石碑と吉弘統幸の辞世の句や矢野嶺雄氏の「石垣原懐古」の詩が刻まれた石碑が昭和四十二年（一九六七）頃建立された。なお、同じ場所に石垣原合戦で討ち死にした敵味方の無名戦士の供養墓も数基安置されている。

七 古戦場橋

荘園町の西側山手にある西別府病院の東南側、境川に

架かっているバス道路の橋は、北方黒田勢の陣する加来殿山と南方大友勢の立石砦（現観海寺）とのほぼ中間に位置しており、このあたりでも両軍の間で激戦が行われた。これを記念してこの境川にかかる橋を「古戦場橋」と命名している。合戦の行われた慶長五年の当時、西別府病院付近から東へ向けて七ツ石付近まで、境川の北側に沿って「忠内が堀」と呼ばれた空堀があったという。

この「古戦場橋」は標高約百五十メートルあり、境川による扇状地帯の山手にあたる。

八 館石団地

立石砦（現観海寺、南立石）に陣を構えていた大友義統は、九月十三日の合戦当日、立石砦を下って西別府病院西側山手付近に陣を敷いた。義統は当時この付近にあった石に腰掛けて戦いの指揮をとった。そのためこの石は「大友腰掛け石」とか、「屋形石」といわれ、のち「館石」といわれるようになる。昭和三十五年（一九六〇）頃、この付近が宅地造成をされて「館石団地」と呼

ばれるようになった。

「館石団地前」バス停は西別府病院から西方約三百メートルの地点にあり、この団地は標高約百七十五メートルから二百メートルの高台にある。

なお、「館石団地前」バス停から東南方向、境川寄りの道路には「館石」というバス停も設けられている。

九 吉弘統幸陣所跡

当時、観海寺東側杉ノ井ホテル付近を坂本村といっていた。ホテル群の東端にある「みゆき坂展望台」の公園には、この付近が大友方右翼の大将吉弘統幸の陣所跡であるという「別府市・別府市観光協会」の説明板が建てられていたが、最近取り除かれている。

この陣所跡は二、三十メートルの朝見川断層崖上にあたり、標高約百四十メートルの高台にある。

また、砦の後方南側には朝見川の上流が崖下に流れていて、合戦のさい飲用の水にも事欠かない天然の要害堅固な城砦であった。

十 大友義統本陣跡

みゆき坂展望台から約一・二キロ山手北西方向に進むと「天満天神宮参道」と「大友本陣之跡 別府市文化財」という木柱の案内が目につく。それを左折してまもなく右手に「本家古屋」という案内板が見え、その奥に大きな家紋のついた古屋家がある。

その付近道路沿いには「石垣原古戦場 大友義統本陣跡（古屋園）別府市役所」や「大友義統本陣跡 解説、別府市教育委員会 別府市文化財調査委員会」などの石造りの記念碑がある。この「大友義統本陣跡 解説」の石碑は昭和六十三年三月に建立された。また、その裏手には「石垣原合戦 戦死者供養塔」と刻まれた五輪島も古屋家の後裔古屋勝馬氏の手によって安置されている。また、この「大友本陣跡」は「べっぶ鶴見岳一気登山道」の道筋にもなっていて、一般市民に紹介されている。本陣跡の北東方七、八十メートルの道路北側に「海雲寺」がある。大友義統は合戦後、この寺において剃髪して黒田如水孝高に降伏したという。

十一 本村天満神社の天井画

「大友義統本陣跡」の西側にはすぐ近くに天満天神社がある。この神社の右手奥には「べっぶ鶴見岳一気登山道 海拔二百三十メートル」の表示を見ることができ

る。天満天神社拜殿の天井には、色鮮やかな「石垣原合戦の図」の天井画が三十三枚にわたって備え付けられている。この原画はかつて日出台演習場（玖珠郡玖珠町）の看守をしていた横田少佐が描いたものを、石垣原演習場（別府市）の看守をしていた村田少佐の解説付きで、別府市南立石在住の沼田岩夫氏が譲り受け保存していた。この天井画は大友義統本陣跡の古屋勝馬氏の発案で、昭和六十三年四月に県立緑ヶ丘高校教諭陶山昌男氏が指導して、この原画をもとに、県立芸短大の学生、大江朱美、橋本昌子の二氏が拡大模写したものである。天満天神社は古屋勝馬氏が管理されていて、この天井画は大友本陣の慰霊祭及び天満神社の行事のさいに一

般公開されている。

十二 宗像掃部の墓

「大友義統本陣跡」の北西方向で、すぐ近くに昭和四十七年（一九七二）七月に建立された「宗像之碑」の表示のある鳥居があり、その奥、北側には、右手に「史跡 宗像掃部墓 別府市指定有形文化財 昭和四十七年五月二十日 別府市教育委員会」の木製の標柱が建てられていて、大友方左翼の大将宗像掃部鎮統かみんしげつの墓といわれる五輪塔が安置されている。なお、五輪塔のそばには小さな石段が五つある。宗像掃部鎮統もこの石垣原の戦いで大友軍の左翼の大将として戦ったが、討ち死したという。この墓の北側、崖下付近には県道別府一の宮線の「本町」バス停がある。

十三 宗像掃部陣所跡

南立石本村の天満天神社の北側道路を西側へ登って行くと、大分自動車道と立体交差する地点に出る。その北西側は断崖の上部となっていて、その北側には石垣原

（鶴見原）がひらけ、北東方には加來殿山や実相寺山を望むことが出来る。

当時、この断崖上には合戦用の鐘を懸けた「鐘掛けの松」があったといわれる場所がある。現在、その地点には「史跡 宗像掃部 陣所址 昭和四十七年五月十日 指定 別府市教育委員会」という標柱と石碑「覽古碑」が建てられている。この「覽古碑」は、故堀藤吉郎氏著の「別府温泉歴史略年表」等によれば、大正六年（一九一七）十月、北白川宮成久王がこの高台に來られて、石垣原の古戦場を展望され当時の戦況を土地の人々から聞かれたという。これを記念して、この場所に「覽古碑」といわれる石碑が建てられた。その後、昭和十四年（一九三九）十一月には、その王子北白川宮永久王も來られて父宮の記念碑を視察されたという。最近、大分自動車道との立体交差のため、この付近の地形の変貌が著しい。

この宗像掃部の陣所址は標高約二百六十五メートルの高台上にあり、この土地の北方崖下には県道別府一の宮線の「堀田」バス停がある。

十四 旗の台、加藤清正像

県道別府一の宮線の「別府ロープウェイ」バス停と「鳥居」バス停との中間地点で、県道左手南側の高台上（標高約五百三十メートル）に肥後熊本城主加藤清正の小さな石像が見える。この石像は昭和二十七年頃に建立されたものという。

これは、石垣原の合戦に東軍徳川家康方の黒田如水孝



吉弘神社



激戦地「セツ石」



本村天満天神社



大友義統本陣跡

高を助けて、西軍石田三成方に組した大友義統を討ち滅ぼそうと、加藤清正軍の先手がこの付近までやってきて軍旗を立てたが、戦いはすでに終わり、大友義統は黒田如水に降伏してしまっていた。そのため、この付近を「旗の台」という。

「大分県史 中世篇Ⅲ」によれば、十四日に内牧で宿陣した清正は、翌日小国から引き返したという。